

第 3 章

研究のまとめ 及び成果と課題

1 「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理について

本研究では「思考力、判断力、表現力」の目標設定や評価が難しいというところから、「どんなふうに難しいのか」「どんなふうにうまくいっていないのか」「なぜ難しいのか」といったことまで一歩進めて、検討する必要があると考えた。そこで、令和3年度の単元計画における「思考・判断・表現」の評価を分析する方法で、本校の「思考力、判断力、表現力」の課題の整理を行った。学習指導要領にも示された「問題解決」のプロセスを基に「思考力、判断力、表現力」の課題分析シートを作成し、単元計画の評価をその分析シートの項目で分類して傾向を基に検討を行った。

単元計画の評価の分析からは、「思考・判断・表現」は「知識・技能」の評価と比較して半数程度しか評価ができていないこと、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点の混同が見られること、「表現」の評価はできているものの、「思考・判断」はあまり評価されていないことが明らかになった。その要因としては、「どの力が育成されていると評価するかは目標設定に基づくものであるが、本校では3つの柱に沿った目標設定を行ってこなかったこと」や、「言葉として表されたものは『思考・判断』として見取ることができているが、行動や様子から『思考・判断』を見取ることが難しいこと」等が挙げられた。

また、生活を切り拓く力となる「思考力、判断力、表現力」とはどのような力なのか、知的障害特別支援学校各教科で示された「思考力、判断力、表現力等」との関連はどのようなものであるか、児童生徒の「思考力、判断力、表現力」が十分に発揮され育成されるような授業とはどのようなものであるか、を明らかにしなければならないことが分かった。以上のことを踏まえ、本校の「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題を整理し、課題整理図として示した。

2 「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業及び指導・支援について

(1) 生活を切り拓く「思考力、判断力、表現力」の検討

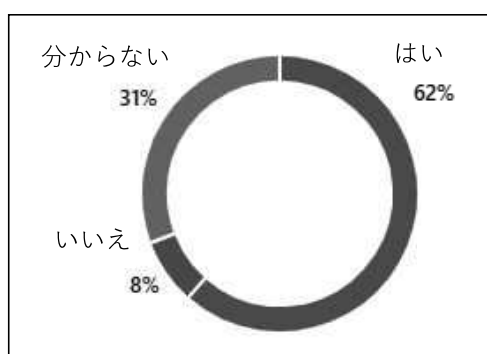
本校の「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題のうち、まず、生活を切り拓く「思考力、判断力、表現力」とはどういった力であるかを検討した。本校職員に「児童生徒の普段の姿を見て『思考力、判断力、表現力』の育成が不十分であると考えること」「今後、伸ばして行きたい『思考力、判断力、表現力』という質問項目で調査を行い、調査を基にグループで話し合い、本校における【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】としてまとめた。この【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】は「事象の捉えに関すること」「課題解決に関すること」「コミュニケーションに関すること」の3点で整理することができた。また検討する中では、「思考力、判断力、表現力」そのものではないが、教師が重視すべきこととして【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】を整理することもできた。

（２）「思考力、判断力、表現力」の目標設定と学習評価の検討

課題の整理からは、目標設定の曖昧さの問題が明らかになった。そこで、本研究では学習指導案様式の改善にまず取り組んだ。本校では各教科等を合わせた指導についても、指導内容として扱う教科の内容を明らかにし、目標も教科別に設定している。それぞれの目標をさらに「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指す資質・能力の３つの柱に沿って設定することとした。

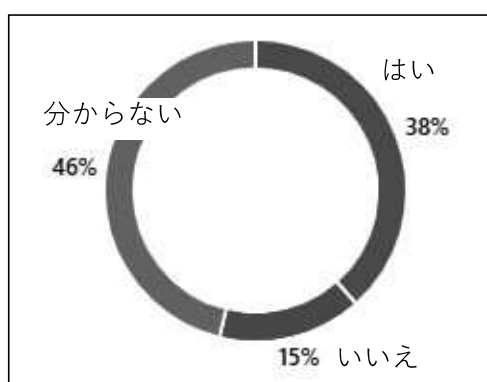
また、児童生徒の発言等の言葉で表されるものだけではなく、行動や様子から「思考・判断」を見取り評価していくために、評価規準の設定を行うこととし、これも学習指導案様式に新たに項目として設けた。

約２年間の実践を経て、目標設定と評価規準の設定について本校職員にアンケート調査を行った。まず、「育成を目指す資質・能力の３つの柱に沿って目標設定を行うようになり、指導の方向性が明確になったり、支援の工夫がしやすくなったりしたと感じるか」の質問に対しては、



〔図77 目標設定についてのアンケート結果〕

「はい」の回答が半数を超えた。「何をねらって授業を行うのか、そのためにはどんな手立てが必要かについて考えやすくなった」「児童生徒が『知識・技能』を習得するだけではなく、どのように『思考・判断』して『知識・技能』を活用するかまで考えて授業作りをするようになった」等の意見が挙げられており、目指す資質・能力の３つの柱に沿った目標設定は有効であったと判断する（図 77）。



〔図78 評価規準についてのアンケート結果〕

「評価規準を設定するようになり、児童生徒の様子を見取りがしやすくなったり、評価が明確になったりしたと感じるか」の質問に対しては、「いいえ」と「分からない」が半数を超えることとなった。「目標を具体的に記述しているだけで、評価規準と目標の違いが明確ではない」「規準の設定に時間をかけても、実際にはその姿が見られない場合もあり、有効性を十分に感じ取れない」「本当に児童生徒の内面を読み取れているのか、不安が残る」等の意見が上がった（図 78）。

評価規準を設定することで見取りがしやすくなったという意見も複数見られたが、評価規準を設定すること自体が難しく、例え設定しても、正しく児童生徒の内面を読み取っていると判断しきれない教師が多いことも分かった。今期研究の課題として残るが、評価の重要性を実感し、目に見えない児童生徒の内面を読み取ろうとする教師の姿勢が生まれたからこそこの課題であると考える。

（３）知的障害特別支援学校各教科「思考力、判断力、表現力等」の目標との関連の考察

本校の教育活動において、児童生徒の「生活を切り拓く」力となる【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の育成をまずは目指さなくてはならないと考えるが、実際の授業においては教科別の目標を設定している。この二者の関係性の整理も研究の課題の１つとして捉え、（１）で上げた【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と知的障害特別支援学校各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標の表記を比較し、関連性について考察した。

その結果、二者の関連は大きいと結論付けられ、関係性を『思考力、判断力、表現力』の目標の関連図で表すことができた。児童生徒の生活を切り拓く力としての「思考力、判断力、表現力」の育成については、実際の指導・支援では「この授業の中で〇〇さんに身に付けてほしい力」として明確にする必要があり、その目標の具体化・個別化には各教科の見方・考え方を働かせる「思考力、判断力、表現力等」を踏まえていくことが重要ではないかと考えた。

本研究の検討の対象は目標等の表記だけであり、実際の指導を通したものではなかったため、今後の実践を踏まえながら検討を深める必要がある。また、検討を進める中で「自立活動との関連が大きいのではないか」という意見も多数挙がったが、そのことについては検討を深めることができなかったことが、課題として残った。

（４）「思考力、判断力、表現力」を育成する教師の支援の在り方の検討

（グループ別研究）

本研究２年次の令和５年度は、授業作りを含めて「思考力、判断力、表現力」を育成するために、教師はどのような指導・支援を行っていかなければならないか、授業実践を踏まえて検討していくことを目的として、本校職員を縦割りでグループ編成しグループ研究を行った。児童生徒の「思考力、判断力、表現力」はどのように発達していくのかを把握し、発達段階や生活経験の状況に応じた手立てについて検討を深めたいと考え、小学部から高等部の縦割りでグループを編成することとした。

第１グループは「自分の思いを伝え相手の思いを受け止める児童生徒の育成」、第２グループは「自分のめあてに向けて工夫しようとする児童生徒の育成」、第３グループは「イメージを広げて表現する児童生徒の育成～好きなことから始めてみよう～」というグループテーマを設定して、年間３回の研究授業を軸に研究を行った。各グループの研究からは、児童生徒の「思考力、判断力、表現力」を育成していくために有効な指導・支援を幅広い視点で明らかにすることができた。有効な指導・支援を（５）で「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントとしてまとめた。有効な指導・支援は学級の実態を踏まえたものとはなったが、学部の段階で整理するまでには至らなかった。

（５）佐大附特版「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントの整理

今期研究最終年度である令和６年度の初めに、令和５年度のグループ別研究を中心として、それまでの実践研究から見えてきた、授業作りや指導・支援の有効な点を佐大附特版の『思考力、判断力、表現力』を引き出す授業作りのポイント」としてまとめて図式化した。ポイントとなる項目を便宜上授業作りのプロセスに沿って配置しているが、それぞれの項目は関連しあっており、また１つ１つの項目の内容も幅広い。令和６年度はこの「授業作りのポイント図」を活用した研究授業を行った。

３ 「思考力、判断力、表現力」の育成に着目した授業実践について

（１）研究１年次の授業実践

研究１年次となる令和４年度は、「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題を明らかにするため、令和３年度の単元計画の評価の分析を行った後に、各学部で各教科等を合わせた指導の研究授業を実施した。また、指導案を改訂し、育成を目指す資質・能力の３つの柱に沿った目標及び評価規準を設定するようにした。授業研究の中では、児童生徒が「思考・判断している姿」とはどのようなものであるかの検討を深め、教科別に設定する目標や評価規準に落とし込むことができたと考える。また、指導・支援にあたっては、児童生徒が試行錯誤したり自由に表現したりできるような時間設定や教材・教具の工夫を行った。どの学部でも児童生徒がイメージしたり考えたりしたことをそれぞれの方法で表現する姿が見られた。しかし、行動や表現から「どんなことを思考したか」「どう判断したか」まで見取ることは難しかったという意見が挙げられた。

（２）研究２年次の授業実践

研究２年次となる令和５年度は、「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題のうち、特に「児童生徒の『思考力、判断力、表現力』が十分に発揮され、育成されるような授業作り」及び、『思考力、判断力、表現力』を育成する教師の指導・支援の在り方』について検討を深めた。検討を深めるにあたっては、学部縦割りのグループを編成して授業研究に取り組み、各グループ年間３回の研究授業を行った。３回目は公開授業研究会として、学校外の参加者と一緒に研究協議を行い多くの意見が出された。「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントとなる点や、教師の指導・支援について有効な点をたくさん見出すことができた。

（３）研究３年次の授業実践

研究３年次となる令和６年度は佐大附特版の「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントを踏まえて、各学部で実践研究を行った。学部テーマの設定は行わなかったが、学部の児童生徒の実態を踏まえ、小学部では「活動を自分事として捉えて主体的に取り組むこと」や「授業サイクルを整えること」、中学部では「コミュニケーション支援」や「話し合い活動

の充実」、高等部では「将来の生活に向けた課題を自分事として受け止めること」や「自分の考えを深める仲間との話合い」を中心に検討が深められた。

4 今期研究の成果と課題

本校職員のアンケートを基に本研究の成果と課題を以下のようにまとめた。

(1) 成果

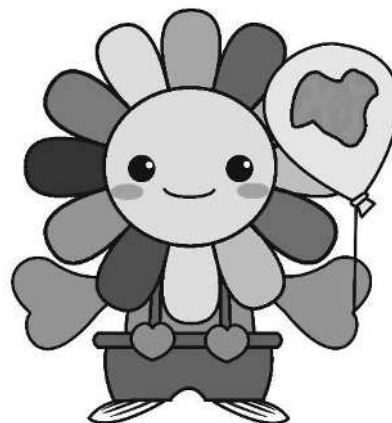
- ・これまでも育成を目指す資質・能力の3つの柱を網羅した目標設定とバランスよく育むための指導・支援を行ってきたつもりではあった。本研究で3つの柱に沿った目標設定をする中で、授業において児童生徒に育みたい「思考力、判断力、表現力」とはどのようなものかと、改めて考えるようになったところ、より広い視点で目標を設定するようになった。
- ・児童生徒の「どんな姿をもって評価するか」を考えることは大変意義があると感じた。しっかり想定できていれば評価はしやすくなる。また、教師側の見取りへの意識も変わった。児童生徒一人一人を「思いをもって行動している」「思考して表現している」主体であると捉えるようになり、「どう感じているのか」「どう思ったり考えたりしているのか」「なぜ、そのように考えたのか」に着目して、より注意深く児童生徒を捉えるようになった。さらに、「振り返りを大切にする」、「写真や動画で記録をとる」等児童生徒の思いや考えを見取るための工夫を意識的に行うようになった。
- ・「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントに挙げた事項を常に意識するようになった。特に児童生徒や学級の実態把握を基に指導の方向性や支援の工夫を様々な活動において行うようになり、「思考力、判断力、表現力」だけでなく、「知識及び技能」の伸長も図られていると感じる。
- ・児童生徒が自分からしたい・やってみたいと思ったことを盛り込み、意欲的に取り組むことができるような授業作りを心がけるようになり、児童生徒の意見を聞いたり話し合ったりすることを大切にするようになった。「思考力、判断力、表現力」の育成にあたっては、「学びに向かう力、人間性等」が大切であることを再認識した。
- ・研究授業を行うにあたって、個人や学級担任間だけではなく縦割りグループや学部職員全員で取り組み、さまざまなアイデアを出し合いながら授業作りを行うことができた。また、評価においても児童生徒の様子から内面を捉える時に様々な視点で話し合うことができたことで、児童生徒の思いや考えを客観的に捉えることができたのではないかと考える。
- ・活動内容から思考・判断し表現する場面を検討するだけでなく、その逆の視点として、思考・判断し表現するためにどんな活動内容がよいかを考えた授業作りをするようにもなった。
- ・研究テーマにもある「生活を切り拓く」に、本校の教育活動がつながるよう、児童生徒と一緒に「現在及び将来はどんな生活がしたいか」「どんな大人になりたいか」と考えるようになった。

(2) 課題

- ・「思考力、判断力、表現力」は教師によって捉え方が異なるため検討した内容も幅広いものとなったのではないかと考える。本取組の中で本校として「思考力、判断力、表現力」の捉えを明確にすることが出来たとは言い難い。
- ・目には見えない児童生徒の内面を読み取り、「思考力、判断力、表現力」を引き出していくような指導・支援を行っていくことは、一朝一夕にできるようになるものではないと考える。特に評価は課題が残ることとなったと考える。今期研究では評価規準を設定することとしたが、どのように設定するか非常に難しかった。児童生徒の内面を見取る実際の評価の際は、教師の主観が入ってしまい妥当性が低いこともあったのではないかと考える。本取組で自分自身の「適切な目標設定」「児童生徒の的確な見取り」の専門性が高まったとは判断できない。玄人的な教師がさらにできるようになるためではなく、どの教師にとっても専門性を高めるような研究としていかなくてはならない。
- ・2年次の縦割りグループで小テーマを設定して研究を進めたことは有意義であった。この3年間の研究を『思考力、判断力、表現力』を引き出す授業作りのポイント」としてまとめることができたことも成果ではあるが、令和5年度のグループ別研究を令和6年度の学部別の研究に十分活かしているとは言い難い。グループテーマに関する授業実践や検討をさらに深めたかった。
- ・【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と各教科の目標との関連の考察や、実際の授業実践において、「思考力、判断力、表現力」の育成には自立活動の視点が重要であることが実感されたが、具体的には検討することがほとんどできなかった。本校においては、自立活動に関する検討が不十分であると考えられる。
- ・学部縦割りのグループ研究においても、学部ごとの研究においても、学部の児童生徒の発達段階や学部の目標等を意識した授業作りを行うことができたが、それが小学部・中学部および高等部と段階的なものになっているかの整理を行うまでには至らなかった。
- ・「生活を切り拓く」という意味で児童生徒にどのような変容が見られたか明らかにしたいが、それは卒業後の児童生徒の生活の様子等から判断しなければならない。今回、追跡調査等を行っていない中で本研究の目的が達成されたと判断することはできない。

〔文献〕

- 1) 佐賀大学教育学部附属特別支援学校研究紀要 19・20 集 (2020・2022)
- 2) 文部科学省 特別支援学校幼稚部教育要領要領小学部・中学部学習指導要領 (2017)
- 3) 文部科学省 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 (小学校・中学校) (2019)
- 4) 文部科学省 特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編 (上・下) (高等部) (2019)
- 5) 国立教育政策研究所 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則 (2013)
- 6) 明示図書 (編集) 特別支援教育の実践研究会
特別支援教育における 3 観点の「学習評価」【各教科・段階別】通知表の文例集と記入例 (2020)
- 7) 東洋館出版社 (編著) 丹野哲也・武富博文
知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント (2018)
- 8) 東洋館出版社 (編著) 丹野哲也・竹富博文
知的障害教育におけるレッスン・スタディー (2023)
- 9) 岩波書店 (著) 今井むつみ ことばと思考 (2010)
- 10) 日本発達障害学会 発達障害研究 2022 年第 44 巻第 3 号 (著) 丹野哲也
「各教科等を合わせた指導」の意義と課題ー育成と目指す資質・能力と指導の形態ー
- 11) エンパワメント研究所 (著) 水野敦之
「気づき」と「できる」から始めるフレームワークを活用した自閉症支援 (2011)



佐賀大学教育学部附属特別支援学校
新マスコット「ふとっくー」

研 究 同 人

【佐賀大学共同研究者】 教育学部 教 授 松山 郁夫
教育学部 教 授 芳野 正昭
教育学部 講 師 日高 茂暢
学校教育科准教授 小松原 修

【学外共同研究者】 佐賀県立うれしの特別支援学校教頭 末永 茂寿（令和5年度）
佐賀県教育委員会事務局教育振興課指導主事 林田 憲明（令和5年度）
佐賀県教育センター指導主事 坂口 百恵（令和5年度）
佐賀県立中原特別支援学校教頭 竹本 久美（令和6年度）
佐賀県立大和特別支援学校教諭 牟田 尋之（令和6年度）
佐賀県教育委員会事務局教育振興課指導主事 園田 洋平（令和6年度）

【校 長】前田 修之
【教 頭】山口 啓介
【教 務】徳島 崇
【副教務】溝口 薫子
【養護教諭】原口 紘美

【小学部】

廣瀬 優佳里（主事）
小野 真智子（研究主任）
香月 枝里子
田中 麻記
橋本 加奈子
渡辺 誠（研究部員）
池田 桃子（研究部員）
小柳 浩貴
弘瀬 由紀菜
内田 ひびき

【中学部】

森崎 由紀（主事）
高柳 祐子
徳一 暁之（研究部員）
船津 直子
相浦 千枝
南里 美保子
酒井 明子
古川 佳代（研究部員）
奥野 梨奈

【高等部】

川原 哲朗（主事）
後藤 滋夫
道脇 誠
吉田 智穂（研究部員）
大島 美和子（研究部員）
鐘ヶ江 梓（研究部員）
岡 智亜紀
蒲地 誠
森高 真弥
宮原 朋子

【令和4年度転出】

荒木 真由美（前校長）
池田 雄一
伊東 麻衣子
内山 春華
松岡 ゆかり
吉田 裕平
吉田 真由美

【令和5年度転出】

大川 和広（前教頭）
山北 史隆
山下 野乃花
吉富 さつき
谷川 忠光
永石 浩
溝口 昌子

研究紀要 第21集

発行日 令和7年1月

発行所 佐賀大学教育学部附属特別支援学校

〒840-0026 佐賀県佐賀市本庄町正里 46-2 Tel0952-29-5045 FAX0952-28-3850

印刷所 株式会社サガプリンティング

